

国語教育相談室

小学校
no.
75

光村図書

特集

実りのある「交流」を目ざして

わたしと
まごは

ZYPRESSEN 春のいちれつ
蜂飼耳

教材
研究

「初雪のふる日」(四年下)

書写
筆圧

—力の入れ方を考えよう

平成23年度版小学校教科書準拠

光村「国語デジタル教科書」 「書写デジタル教科書」



光村の「デジタル教科書」が進化しました!

光村「国語デジタル教科書」は、2005年に発売以来、約3,000校の小学校に導入され、大きな反響をいただいています。新しい「国語デジタル教科書」は、多くの先生方からのご意見を反映して、より使いやすく、授業をより楽しく豊かにするためのツールに進化しました。今まで以上に、授業を強力にサポートします。



「国語デジタル教科書」 学校フリーライセンス 1～6年
各学年 **68,250円** (本体価格 65,000円+税 5%)

「書写デジタル教科書」 学校フリーライセンス 1～6年
各学年 **10,500円** (本体価格 10,000円+税 5%)

※ 学校フリーライセンスとは、校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。
※ 国語と書写のセットでご購入いただき、組み合わせてお使いいただけます。また、国語、書写それぞれでご購入いただくことも可能です。

「国語デジタル教科書」
中学校版は、
2012年春発売予定!

ただいま
「実践活用ガイド」を配布中!

デジタル教科書を活用した実践事例をご紹介します。
体験版と併せて無料で配布しています。

詳しくは下記ホームページまで!
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.145 2012(平成24)年1月24日発行 定価126円(税込)
発行人=常田 寛 発行人=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp
印刷所=村田印刷工業株式会社 デザイン=mint grafix

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

ZYPRESSEN 春のいちれつ

ことばにはこんなことができるのだな、と改めて
気づいたのは、高校生のころ宮沢賢治の「春と修羅」
を読んだときのことでした。ある日、学校の帰りに
横浜駅の書店に立ち寄り、なんとなく手にとった岩
波文庫の『宮沢賢治詩集』。そこには、ことばを覚
えていく過程のどこかの段階でいつのまにか身につ
いたような、詩とはこういうものだ、という思いこ
みを超えた詩があったのです。

読んでみると、視覚的な要素と聴覚的な要素が見
事に絡みあい、この一編でしかありえない、置き
換えのきかない世界が立ち上がってきました。短
く、まとまりのよい、一点に感情や感覚の頂点を
もってくるような詩とはちがう書き方。ある意味で
は、ばらばらで整理されていないかたちにも見えま
した。けれど、歩きながらメモしたことばから生ま
れた「心象スケッチ」だと知ると、なるほど、その

勢いと、行から行へ高まっていく熱にこそ、これら
の詩の味があるのだとわかりました。

「ZYPRESSEN 春のいちれつ」とは詩集『春と
修羅』の表題作に出てくる一行です。ドイツ語をふ
くんで糸杉の並木を表しますが、たとえば、同様の
内容だからといってこれが「春の空の下、糸杉の木
が並んでいる」だったらどうでしょう。似てはいて
も、全然ちがうものになります。詩には、そのこと
ばが使われているからこそぴたりとなにかを表す場
合があります。そのことばだからこそ出現する世界
があるとは、ふしぎです。

視覚、聴覚、触覚などに働きかけることばの性質
が合致をみせる瞬間。詩の一行からひろがっていく
味わいは、ことばには意味や情報を伝達する道具と
しての使い方とはまた少しちがう側面があることを、
知らせてくれるのです。それは、ものを感じとり、
感じとることからまた考えていくというように、感
覚と思考に、奥行きを与えるものでもあると思いま
す。日常のことばの向こうに見える、はじめての表
現や、ただ一度きりのことば。詩のことばには、生
きている、というこの瞬間を、驚きで満たす力があ
ります。そこには心をいきいきと踊らせる力がある
のです。



1974年神奈川県生まれ。詩人。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。2000年「いまにももうおっいてく陣地」で第5回中原中也賞、06年「食うものは食われる夜」で平成17年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。著書に絵本「うきわねこ」（プロンズ新社）、エッセイ集「孔雀の羽の目が見てる」（白水社）、「秘密のおこない」（毎日新聞社）、童話集「のろのろひつじとせかせかひつじ」（理論社）、小説「転身」（集英社）などがある。

CONTENTS

わたしとことば ZYPRESSEN 春のいちれつ ————— 蜂飼 耳

特集 02 実りのある「交流」を目指して

- 提言1 インタビュー 一人では気づけなかったことに気づく ————— 高木まさき
- 提言2 交流活動を充実させる教師のはたらき ————— 梶田萬理子
- 実践1 言葉について考えよう ————— 高橋美千代
- 実践2 「ありの行列のひみつパンフレット」を作ろう — 西松亮介
- 実践3 宮沢賢治作品のよさを紹介しよう ————— 北川尊士

教材研究のススメ 2 14 「初雪のふる日」(4年下) ————— 興水かおり

書写の時間を考えよう 9 16 筆圧 — 力の入れ方を考えよう ————— 新しい指導を考える会

古典って楽しい! 20 第6回 俳句作り ————— 青山由紀
作・画／吉永直子

実りのある

「交流」を

目指して

学習指導要領には、「書くこと」「読むこと」に「交流」という学習過程が示されています。本特集では、その「交流」に焦点を当てます。どんなことを意図し、何に気をつけて指導をすればよいか、授業のイメージがもてるよう、高木まさき先生と梶田萬理子先生にそれぞれご提言をいただき、そして、三つの実践事例をご紹介します。

一人では気づけなかったことに気づく

横浜国立大学 教授 高木まさき

自分の考えがもてるように

—新しい学習指導要領では、「書くこと」に「交流」「読むこと」に「自分の考えの形成及び『交流』」という学習過程が明示されました。このように交流が位置づけられるようになったことには、どのような背景があるのでしょうか。

高木 直接的には、PISAの調査結果、それを受けた全国学力・学習状況調査の結果があると考えられます。日本の子どもたちは、海外に比べて、自分の考えを書くことが苦手であるという傾向がはつきりしてきました。それで、「書いて終わり」「読んで終わり」ではなく、自分がどう考えるかを教室の中で伝え合うことが求められるようになったのだと思います。

考えてみれば、自分の考えの交流というのは、本来、自然な行為なんですよ。例えば、文章を書いたら、「何を書いたのかな」と読み合っているのは普通のこと。読むこ

とにしても、同じ文章を読んだら、どう思ったか尋ね合うのは、日常生活で当たり前に行われていることだと思います。もしかすると、戦後の読解中心の国語の授業では断ち切られていたことなのかもしれません。そんな状況のなか、PISAなどに後押しをされて、自然なあり方に立ち戻ったのではないかと私は解釈しています。

書いたら読み合う、読んだら考えを伝え合うという経験を重ねること、「自分の考えをもつ」ということが身につくはずで。と同時に、やり取りのなかで友達の考えを聞くことによって、新たな自分の考えが引き出されることもあると思うんです。友達が、違った視点から違った見方をしていたり、違った視点から同じような考えをもっていたりということがあるでしょう。それに気づくことで生まれる新たな発見もあります。また、「自分とは違うことを考える人間もいるんだな」という、もう一段外から見た気づきをもつ子どももいるかも

しれません。

一人では気づけなかったことに気づく、友達の新たな一面を知る——そう考えると、同じ教室で、違った価値観、ものの見方・考え方をもつ子どもたちが、それぞれの考えを交流するのは、大きな意味があるように思えます。

あるいは、「学力の向上」ととらえることもできるかもしれませんが。書いたものや読んで思ったことをやり取りすることで、子どもたちは書くことや読むことをおもしろいと思うようになるはずです。それは、結果的に学力向上にもつながっていくといえるでしょう。

他者の視点を入れながら書く

—「書くこと」における交流という「書き方」について助言し合うということが、まず思い浮かびます。

高木 国語科ですから、書き方に注目する

ことはとても大事です。でも、日常の言語生活を考えるとどうでしょう。普通、文章を読むときには、どんな情報が盛り込まれているのかなどといった「内容」に目がいきますよね。そういう自然さは失ってはいけないと思うんです。ですから、内容についての助言や意見だってあつていいでしょう。

私が思うのは、内容をうまく伝えるためには、結局、きちんとした書き方が求められるということです。内容と書き方は、密接に結び付いたものだから。例えば、内容について意見されたときに、「自分はそんなこと書いたつもりはないのに」と思うことがあるでしょう。それはきっと、書き方に問題があつて、読み手に内容が伝わっていないからなんです。内容について議論すると、最終的には書き方の問題になっていきます。ですから、どちらも切り離しては考えられません。ただ、授業のしかたとしては、分けて考えたり、どちらかに重きを置いたりして交流するのがよいかもしれませんね。

学習指導要領解説には、中学年で「推敲して書き終えた文章だけではなく、学習計画や、取材、構成の段階のメモなど書くこととの学習過程についても発表し合うように工夫する」とあります。その意図について

なく考えを述べるのは難しいので、ノートやワークシートに書かせてから発表させるなど、段階を踏むよう手立てを工夫したいものです。

何より重要なのは、子どもたちの考えを発表させるだけで終わるのではなく、それを教師が意味づけたり整理したりし、子どもたちが確認できるようにするという事です。そうすることで初めて、子どもたちは、出てきた考えのどこが違うのか、なぜ違うのかということを考えることができるんだと思うんです。そこで考えたことは、次の学習へと結び付いていきます。教師は、その交流を通して、子どもたちに何を考えさせたいのか、何に気づかせたいのかを明確にイメージしてから授業に臨むようにできるといいですね。

「話すこと・聞くこと」の役割

——「話すこと・聞くこと」には「交流」という学習過程はありません。

高木 「話すこと・聞くこと」というのは、それ自体が交流の学習だといえます。話題設定・取材、話す、聞く、話し合う、すべてに交流の要素が含まれています。その意味で、文言としてはありませんが、学習の

語るのに、まず、「プロセス・アプローチ」(※)という方法に触れたいと思います。これは、アメリカで一般的になっている方法で、作文の作成過程のなかで積極的に他者との交流をさせるといふものです。記述をする前に、集めた材料をどう並べるか友達と話し合つて考えるなど、日本でも実践されていますね。

こういうことがアメリカでなされている背景には、「論理的であるために重要なのは、完全で正確な表現かどうかではなく、分かりやすく納得できる表現かどうかだ」という考え方があります。つまり、論理的であるためには、相手の思考の流れに沿つて伝える必要があり、そこでは相手との「対話」が不可欠であるということです。相手に応じて、伝え方の型を工夫するわけです。そう考えると、書くことの過程で、他者の目を入れて「これで伝わるかな」とやり取りすることは、論理的に伝えるという点で重要なことなんです。具体的には、書いたものを交換して読み合つたり、教師が選んだものをいくつか取り上げて、クラス全体で確認し合つたりという学習活動などが考えられますね。

過程において、当然、考えを交流する場面が入ってきます。

あるいは、「話すこと・聞くこと」の学習を積み重ねることで、「書くこと」「読むこと」での交流がより豊かになるという考え方もできるでしょう。「自分の考えを安心して言える」空間ができていることが、考えを交流するときにはとても重要になってきます。これは、学級経営と密接に関わる部分でもあります。が、「話すこと・聞くこと」の学習の目的や効果でもあるんです。「話すこと・聞くこと」の学習を通して、そういう確かな空間を作っておく必要があるでしょうね。また、話し合うなかで、友達の考えを否定するような発言や話し方をする子が出てくることも考えられます。必ず根拠とともに考えを言うとか、よくないところだけでなくよいところも言うようにするとか、そのあたりは発達段階に応じた配慮を欠かさないようにしたいですね。

さらに、話し方・聞き方の技術的な側面——論点を整理して話す、前の人の考えに関係つけて話すなど——での土台作りも、「話すこと・聞くこと」は担っているといえます。ただ、話し方・聞き方をしっかりと押さえていても、それだけでは「書くこと」「読むこと」での交流はうまくいきません。

みんなが読むことの意味

——「読むこと」においても、「自分の考えをもつこと」に主眼が置かれることになるのでしょうか。

高木 そうですね。自分の考えをもつことと、それから、その考えを広げたり深めたりすることを大事にしたいですね。

例えば、「ごんぎつね」を読んだときに、多くの子は「ごん」は死んでしまったと思うでしょうけれども、死んでいないと思う子もいるかもしれません。では、なぜそう思うのかをクラスで話し合うことが、「読み」の深まりにつながるのではないのでしょうか。そして、そういう経験を通して気づいた、自分と友達との読み方や解釈の違いが、自分の「読み方」の選択肢を増やすことにもなっていくはずですよ。また、自分と友達との違いに気づくというのは、他者理解にも通じます。「みんなが読む」ということの意味は、こういう点にもあるのかもしれませんね。

「読むこと」においても「書くこと」同様、マッピングで考えを整理するとか、表現だけに着目して読むとか、自分の考えをもつまでの過程における交流も想定できるでしょう。指導の際には、なんの準備も

「書くこと」の交流では「書くこと」の学習内容・観点が、「読むこと」の交流では「読むこと」の学習内容・観点がはつきりしていないと、話し合いがかみ合わない。その場で思いついたことを言い合うのでは、考えが深まるはずはありませんよね。教える側は、その交流で押さえたい観点をきちんともち、話し合いがそこに向かっていくように手立てを考えるような心がけたいものです。

高木まさき

静岡県生まれ。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会委員などを歴任する。「ことばと学びをひらく会」会長。著書に「他者」を発見する国語の授業(大修館書店)、『合科的・総合的な学習のための読書関連単元100のプラン集』(共編著 東洋館出版社)など。光村図書の小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。



※プロセス・アプローチ
過程を重視した作文指導のこと。書くまでのプロセスを直線的にたどるのではなく、その一部を何度も繰り返しながら、自分の文章を練り上げていく方法。

交流活動を充実させる教師のはたらき

奈良女子大学附属小学校 副校長 梶田萬理子

1 書く活動を 取り入れること

交流活動の前に大事なことは、書く活動を取り入れ、自分の考えをもてるように時間を保障することである。

教科書の手引きにも、一年下から「…を書きましょう。」「…をノートに書きましょう。」という文言が多く出てくる。また、その「課題」や「問題」が、児童の意欲をわき立たせ、真剣に打ち込むものであればあるほど、その後の交流活動は活発になる。高学年になるほど、「…についてあなたは思うだろう。」「…について、感じたことや気づいたことを話し合おう。」と、自分の考えがもてるように、手引きには、問いつ方を工夫したものが増えている。

交流活動中に大事なことは、集団で考え合う態度を育てることである。個々の社会性が身につくよう指導しなければならぬ。交流活動は、学び合いであり、聞き合い

である。友達の考えを聞いて、自分の考えの不備や不十分な点を補ってもらう時間だという意識を児童にはっきりもたせたいものである。友達や教師から学ぼうとする構えがあると、聞き方や友達の発言の受け止め方が違ってくる。

また、建設的なものを考えていく姿勢が身につくよう、人の揚げ足を取ったり、話題の中心でないところにこだわりすぎたりしないように実践を通して学ばせていきたい。

交流活動の後に大事なことは、聞いてどうだったのかを振り返るために、書く作業を取り入れることである。その視点として、

- ・自分の考え（作品）はどうだったか、足りなかったことや考え直したりしたこと
- ・聞いてよかったことや分かったこと
- ・新しく気づいたり考えたりしたこと
- ・まだよく分からないこと
- ・などが考えられる。

これは、「ノートとなかよくなろう」三

2 なんのために交流活動を行 うのか、そのねらいを 児童に伝えること

年上 23ページの「じゅぎょうのおわりに、ふりかえつてまとめを書く。」が参考になる。また、「ちいちゃんのかげおくり」(三年下) 20ページでは、「あなたと友だちの考えで、同じところ、ちがうところはありましたか。友だちの発表を聞いて、あなたの考えはかわりましたか。ノートに書きましょう。」とあり、「かるた」(三年下) 81ページでは、「友だちの話を聞いて、はじめて知ったことも、ノートに書いておきましょう。」と視点を挙げている。

交流活動は、どの場面で行き入れるかによって、そのねらいが違ってくる。そこで、なんのための交流時間なのか、児童に「めあて」をもたせ、見通しをもって学習に臨ませると、自ら学び取るようとする意識が高

まる。
では、授業のどの場面で交流活動を設定し、その指導における観点はどうかあればよいのかを取り上げてみたい。

① 学習過程の初めに

— 自分の考えをもてなかったり学習のイメージがわいてこなかったりする場合
課題によっては、何をどうすればよいのかとまどう児童がいる。そこで交流活動を取り入れ、イメージをもっている児童の考えを引き出し、聞き合うことによって、参考にしたり刺激にしたりする環境をつくることができる。また、イメージをもっている児童もお互いに比べたり見直したりできるので、その後の学習をより納得して進めていけるよさがある。

② 学習過程の途中で

— 自分の考え（作品）をもって臨む場合
読み取りや作文など、学習過程の途中で、友達と考えを交流し合い、自分の考えたことと書いたことを見直し、次のステップへ生かすことがねらいである。

③ 学習過程の最後に

— 完成させたものを発表する場合
仕上げたものを発表して、学習を終える場面で取り入れる。ここでも、発表会形式で終わらせず、聞き手が分からないことや

3 日常の継続指導で 育てる

もつと知りたいことを尋ねたり、感想を伝えたりして交流できる場になければならない。それにより、次の新たな学習の深まりを期待できるからである。

交流活動では、児童は、話し手になったり聞き手になったりして聞き合うものである。まずは、話し手としての態度や聞き手としての態度を日々の学習の中で育てなければならぬ。

特に、学び合いの観点からいえば、よく聞く子どもを育てることが求められている。そのためには、教科書の「よい聞き手になろう」(三年上) 32・33ページが参考になる。「前の人の言ったことをうける言ひ方」は、ぜひ身につけさせたいものである。36ページには、「よい聞き方、よい話し方」がまとめられている。

そして、五年の教科書には、「きいて、きいて、きいてみよう」や「話し合うために大切な言葉」が取り上げられ、聞き手や話し手の心得が学べるようになっていく。

また、聞き手がメモをすることや、発表を聞いて、尋ねたり感想を伝えたりするこ

とは、「ともごさんは どこかな」「あったらいいな、こんなもの」などに見られるように、二年上の教科書から折に触れて取り上げられている。

以上のような点を意識し、学習の中に充実した交流活動を位置づけていきたいものである。

梶田萬理子

愛媛県生まれ。奈良女子大学附属小学校 副校長。自律的な学習法の実践を積み、学校発行の機関誌に主題・実践論文等を100編以上執筆。共著に「学習力」を育てる秘訣、「確かな学習力を育てるすじ道」(以上、明治図書)など。光村図書の小学校「国語」教科書編集委員を務める。



言葉について考えよう

使用教材：「自分を見つめ直して」（六年）

名古屋市立柳小学校

高橋美千代

1 はじめに

随筆を書くことは、自分を深く見つめ直すことにつながる。六年生後半においては、これまでを振り返ったり自分の成長に気づいたりするうえで意義あることといえる。

随筆は、読み手を意識して書くことが必要である。読み手を意識して書く力とは、「伝えたいことに関わる内容を掘り起こし、そのときの様子や気持ちを読み手に伝わるように表現を工夫して書く力」と考える。

本単元では、その力を育てるために、取材と推敲の二つの段階で交流の場面を位置づけることにした。取材の段階では、交流により、伝えたいことに関わる内容を掘り起こすことができるようにしたい。推敲の段階では、交流により、友達の表現のよさを見つけ、自分の随筆に生かすことができるようにしたい。これら二つの交流を通して、読み手を意識して書く力を育てたい。

2 指導計画（全九時間）

第一時	随筆という文章様式を知る。
第二～四時	取材 ①「思いだシート」を基に質問し合う。 ②「書きだシート」に記入する。
第五時	構成・第一記述 ①モデル文を基に構成について考える。 ②下書きをする。
第六・七時	推敲 ①友達の随筆から表現のよさを見つける。 ②互いに声に出して読み、不自然な表現はないか確認し合う。
第八時	第二記述 ・表現のよさを自分の随筆に生かして書く。
第九時	交流 ・友達の随筆を読み、感想を伝え合う。

3 指導の実際

【取材の段階での交流】

第二時

自分を変えた〇〇（言葉、人物、出来事など）を決めさせ、最初と最後で気持ちが変わったのかを「思いだシート」に書かせた。さらに、伝えたいことに関わる事実を□囲み、気持ちを○囲み、会話を吹きだしで書かせた。

第三時

「思いだシート」を基に二人組で質問し合った。質問されて答えたことを付せんに書いて貼るようにさせた。二人組での会話を二回行い、多くの内容を掘り起こせるようにした。質問の際には、内容を深めるために「相手の答えの一部を繰り返して質問する」ことを意識させるようにした。

＜A児とB児の会話＞

- A わたしを変えた言葉は「また次」です。
B どんなときの言葉ですか。
A 大縄を連続で跳べたときの言葉です。
B なぜ、連続で跳べたんだと思いますか。
A がんばって練習したからです。↓付せん
B 練習のとき、どんな気持ちでしたか。
A いやだなと思っていました。↓付せん

第四時

付せんを貼った「思いだシート」を基に、「書きだシート」に書かせた。質問されて思い出したことを整理するためである。友達の質問によって書きたい内容が掘り起

こされたため、「書きだシート」の内容は、より詳しくなっていることが分かる。

【推敲の段階での交流】

第六時

友達の随筆を読み、心の動きが分かる表現を学級で紹介し合った。その後、友達の随筆やこれまで書きためて集めてきた言葉の中から、自分の随筆に取り入れられそうな表現はないか考えさせた。

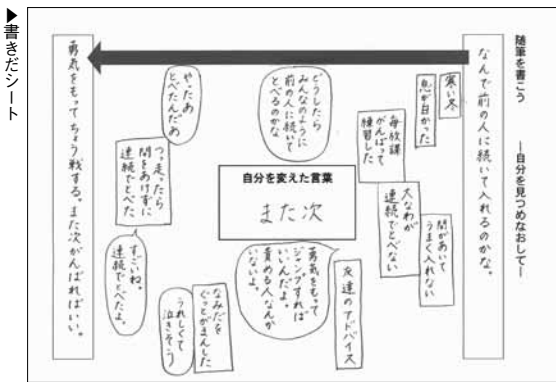
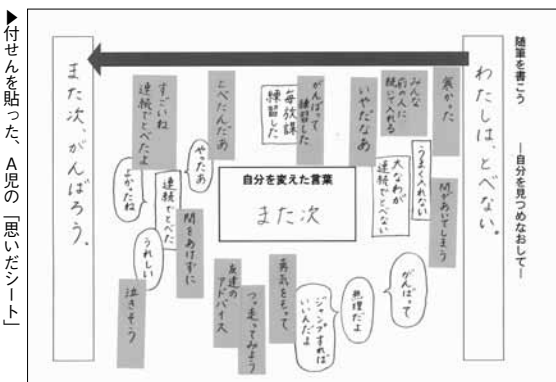
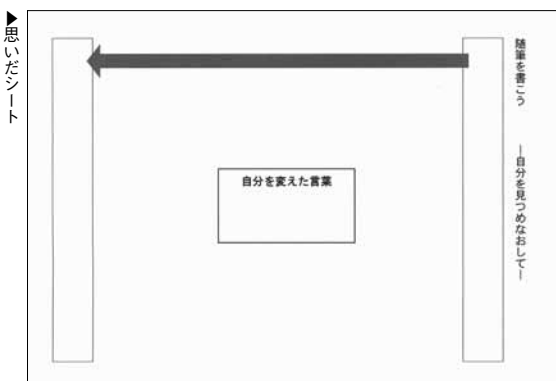
第七時

二人組で、互いの随筆を声に出して読み合い、不自然な表現はないか確認し合った。C児は、D児の表現「あの言葉のおかげで、私はこんなになんばれたんだ」と

4 おわりに

ころを目に焼き付けて恩返ししたい。」が分かりにくいと話し、D児は、「あの言葉のおかげで、私はこんなになんばれたんだ」というところを見せたい。そして、みんなの心に残るようなフレーズをして恩返しをしたい。」と書き直した。

推敲の段階では、表現のよさを友達の随筆や自分がこれまでに集めてきた言葉の中から取り入れるようにしたため、表現を工夫して書くことができた。しかし、無理に取り入れようとして不自然な表現になる児童も見られた。取り入れた後、声に出して読み合い、確認し合うことは、不自然な表現に気づくことにつながった。ただ、なかには、表現の不自然さに気づけず、助言ができない児童も見られた。今後は、多くの表現に触れる機会を増やしたい。



1 はじめに

児童の日常生活、毎時間の授業の中で交流は常に行われている。では、国語科で求められる「交流」とは何か、また、「交流」を通して児童にどんな力をつけるのか、そのためにはどのような手立てが必要か、これらを意図して実践を試みた。

本単元では、「イルカのねむり方」での学習を基に、「ありの行列」の内容をパンフレットにまとめるという学習活動を設定している。それを通して、文章の組み立てを考えたり、段落ごとのキーワードやキーワードを抜き取ったりした後に、読み取ったことをクラスで出し合う。

中学年における身につけさせたい力(指導事項)に基づき、自分の読みをより確かなものにするための「交流」、そして、文章に対する互いの感じ方の違いに気づくために単元の出口(第三次)に位置づけた「交

流」。児童は、それぞれの違いを知り、ねらいを明確にして学習に取り組んだ。

2 指導計画(全十一時間)

第一次 (三時間)

既習の説明的文章について、構成や学習内容を想起する。「イルカのねむり方」の説明のしかたや構成(何が「どのように」書かれているか)をつかみ、それを基に「ありの行列のひみつパンフレット」を作り、クラスのみんなで読み合おう」という目的をもち、学習の計画を立てる。

第二次 (六時間)

パンフレットの形式を決める。「問い」と「答え」の段落を見つけて文章の大きな構成をつかみ、ワークシートを用いて段落に書かれている事柄を要約し、それをパンフレットにまとめる。要約したり要点を読み取ったりする際に、グループで意見交流をして読みを確かめるものとしていく。

第三次 (二時間)

ワークシートをパンフレット形式にまとめ直し、表紙・裏表紙をつけて完成させる。それをクラスの友達と読み合って感想交流をし、単元を振り返って、身についた力を確認する。

3 指導の実際

第一次 第五～九時

段落の要点、内容を要約した文章が適切かどうかグループで意見交流し、読みを確かめるものにする段階である。

パンフレットの形式については、第一次でモデルを提示しておく。ワークシートを使って要点を読み取り、内容を要約する。その際、①繰り返し出てくる言葉を確認する、②段落内で最も大切だと思う文章に線を引くなどの、中心となる語や文を読み取るポイントを示し、個人で読み取れるようにした。それぞれが自分の考えをもったう

基に「何が」どのように書かれていたか」の視点で感想を書くよう指導した。

4 おわりに

交流において必要なのは、①何について交流するのか、②交流して何を求めるのか、についての見通しを、教師が事前に明確にもっておくことだ。「グループで話し合っ

てごらん」「思ったことをなんでも言っ

てごらん」では不十分である。第二次の読み取りの際にグループでの交流を取り入れたことで、自分の読み取りに自信をもったり、また、手直しをしたりする児童の姿が見られた。交流が「読み」の力の高まりにつながったことがうかがえる。

単元の最後に、パンフレットを使って文章についての自分の考えを交流したことで、児童は、同じ言葉や文に着目していても違う感想をもつ友達がいることを発見したようだった。また、友達が自分と全く同じ言葉や文に着目して、似たような感想をもっていることに気づく児童もいた。交流を通して、さまざまな発見に驚き、そして、喜んでいたように思われる。

この「交流」で得た力は、他の単元・他教科・他領域にもつなげ、活用できるようにしていきたい。

グループでの話し合いを成功させよう

○まず、グループみんなが発言しよう。そのためには、少しテーマからはずれていても、最後までしっかり聞いてあげよう。

○意見を言うことがとくいな人は、少しゆずってあげよう。友達の意見が分かりづらいときに、「つまり、こういうこと？」と、バックアップしてあげよう。きつと、言ってもらった友達は自信が

○自分と全然ちがう意見を聞いたとき、さいしよからひいていしな

○でも、「いつ考えてもちがうよ。」と思ったときは、しっかり自分の考えを伝えて、相手にもちうーん考えてもらおう。

▶「グループ学習の手引き」の一例



▶児童が作成したパンフレット

宮沢賢治作品のよさを紹介しよう

使用教材：「やまなし」「イーハトーヴの夢」(六年)

北九州市立黒畑小学校

北川 尊士きたがわ たかし

1 はじめに

本単元は、宮沢賢治の不思議な魅力ある作品と作者自身の生き方を重ねることで、文学的な文章への見方・考え方を広げることとをねらう。

ここでは、単元を通した読書活動を位置づけた。紹介したい宮沢賢治の作品を選んだ後に「イーハトーヴの夢」を読み、作品に対する賢治の思いに触れ、自分の選んだ作品と重ねる。そして、「やまなし」を読んで習得した「目のつけどころ」(読みの観点)から、自分の紹介したい作品を読み直すことで、作品の新たなよさを見つける。その後、よさを伝える紹介パンフレットを作る。こうした学習を通して、児童は自分の読みを広げることができると考えた。

また、「目のつけどころ」を習得し、文学的な文章への見方・考え方を広げる手段として、次の三段階の交流を位置づけた。

- ①自分の考えをつくる
- ②小グループで交流する
- ③全体で交流する

2 指導計画(全十二時間)

第一次 (三時間)	学習課題を作り、計画を立てる。
第二次	①「やまなし」を読み、初読の感想を交流する。(一時間) ②感想を基に、「目のつけどころ」を決める。(一時間) ③「目のつけどころ」により、「五月」の場面のよさを見つけて紹介し合い、自分の選んだ作品のよさを見つける。(二時間) ④「目のつけどころ」により、「十二月」の場面のよさを見つけて紹介し合い、自分の選んだ作品のよさを見つける。(二時間)
第三次	自分の選んだ宮沢賢治作品のパンフレットを作り、作品のすばらしさを五年生に紹介する。(三時間)

3 指導の実際

自分の選んだ宮沢賢治作品のさらなるよさを見つけるため、「やまなし」を使って、「目のつけどころ」を習得する学習(交流)を設定した。第二次の第三・六時に、前述した三段階の交流を、順に位置づけた。

①自分の考えをつくる

「やまなし」のよさを見つけるために、付せんを活用して自分の考えをつくる活動を行った。まず、「五月」の場面を読み、心に残ったキーワードを黄色の付せん(一枚に一事項)に書く。次に、書いた付せんで分類し、小見出しを付ける(青色の付せん)。そして、各付せんで矢印で関係づけ、気がついたことと「五月」の場面のよさをノートに書く。この過程を通し、個人差はあるものの、児童は、自分なりの考えを形成していった。

自分の考えづくりの指導は、付せんの使

その作品のさらなるよさに気づくことができた。

4 おわりに

最初は、宮沢賢治作品のよさを「きれいな光の世界」などと漠然と感じていた児童が、「まばゆい白い火や雪花石膏の板など、色を使った言葉から美しい様子が伝わってくる」といったように、その作品の具体的なよさに気づき、作品への見方・考え方を広げていった。

この学習では、三段階の交流を位置づけた。これらを通し、児童は、自分が読めていないところに気がつくことができていたように思う。さらに、自分の選んだ作品のよさをより深く考え、読むおもしろさを実感していた。この実感を伴った理解が、文学的な文章への見方・考え方を広げることにつながったと考える。



▶小グループでの交流の様子。ノートを見せながら考えを述べる。



▲付せんを活用したノート

い方の具体例を示したり、よい例として児童のノートを紹介したりするなかで行った。児童一人一人がイメージをもちながら、自分の考えをつくっていたことから、有効な指導であったと考える。

②小グループで交流する

自分の考えを付加・修正することができるよう、小グループ(三〜四人)での交流を設定した。初めに、自分の考えを述べる。そして、その考えに対して疑問に思うことを尋ねたり、自分の考えと比較して考えたりする。この交流により、児童が自分の考えを付加・修正していき、見方・考え方を広げていった様子がうかがえた。

③小グループでの交流の一場面

A「五月」は、不思議な世界がとてもしきれ

③全体で交流する

よさの理由を全体で出し合い、関係づけることにより、児童は、「目のつけどころ」を見つけていった。「やまなし」で見つけた「目のつけどころ」は、「賢治らしい表現」「構成」「メッセージ」「出来事」「登場人物」「色をイメージする言葉」であった。これらの観点で自分の選んだ作品を読むことで、

2 「初雪のふる日」 (四年下)



第一回では、「読むこと」の教材研究の三つの視点(子どもの視点・読者の視点・指導者の視点)をご紹介しました。今回は、実際に教材を読んでいく過程を、担任の教師になったつもりで書いてみます。新しい教材、「初雪のふる日」(四年下)を取り上げました。

読者の視点で

まず、第一の読み、「読者」の立場で読む。もちろん音読。小さく声を出して。ページを追うことにうすら寒くなってきた。迷子になったときのような心もとなさ、だれかに助けを求めたいような不安感、恐怖感が募ってきた。112ページまで読んで、挿絵の色彩に救われたような気がした。なんとも不思議な話だ。「初雪がふる日」に特別に選ばれた子に起こる怖い話。

子どもの視点で

次に、第二の読みに取りかかる。「学習者」の立場からの読みである。今までの学習経験から、子どもたちはきっと、こんな学習手順や学習内容をイメージすることだろう。

まず、学習活動を確認しよう。「作品のひみつをさぐる」か。この作品に秘密があるのだ。「読み終えたときに心に残る感じは、どこから来るのでしょうか。場面の様子を表す言葉や表現に着目して読みましょう。」……そうか、作品の秘密を解くカギは、場面の様子を表す言葉や表現にあるのだな。わたしの読後感も、作品に使われている言葉や表現から引き起こされたのか……。場面の様子に着目してもう一度読んでみよう。

そうだ、その前に「学習の手引き」を開いて、どんな方法で学習を進めるのか、確認してからにしよう。
□↓詳しく読むためには場面を分けたほうがいいということだな。あつ、秘密のカギを探す方法があったぞ。

▼↓天気・色や触った感じ・大きさや数・繰り返し表現・修飾語・文末表現。これを場面ごとに書き出してみよう。



私も、子どもの気持ちを想像しながら、場面分けし、カギの言葉や表現を書き出してみる。実際取りかかってみると、

- ・全体を何場面に分けたらよいか。
- ・場面の様子だけでなく、女の子の様子や行動からも読後感が引き出されるのではないか。
- ・書き出す前に、本文に囲みやサイドラインを入れて、カギの言葉や表現に印を付けたほうが効率的ではないか。
- ・どんなワークシートやノートを用意すれば、書き出しやすいだろうか。
- など、指導展開や配慮点が自然に浮かんできた。

また、音読することで、辞書を使って調べさせたい語句や「後がつかえる」「息をつく」など、注意したいアクセントにも気づいた。石けり・唱え歌・なぞなど・おまじないなどの遊びを実際に経験させなくなった。「くわしくする表現(修飾語)」の復習の必要性にも思い至り、三年生の学習を振り返らせたいと思った。

学習者の立場で読んでいたはずが、いつの間にか教材分析や学習活動、指導展開などにも踏み込んでいる自分に気づく。

本当に、「教材研究八割達成」という感じである。

ここで、自分の囲みやサイドラインと朱書きの指導書を比べてみるとどうか。驚くことに、私のサイドラインや書き込みと朱書きには重なる部分があった。もちろん、気づけなかった点もあるが、私のオリジナルも。例えば、「――」の使い方に「繰り返し」と「後に続く言葉の省略もしくは、途切れ」の二種類が出ていること。女の子(生)の赤、うさぎ(雪・静・死)の白、寒さやおびえの青、春(よもぎ)の緑といった色彩の象徴性も感じられたこと。うれしくなってくる。

こうして、朱書きの指導書と比べてみると、いかに「自分の考えをもつ」ことが大切か身をもって実感することができると。子どもたちにも、ぜひこうした体験をさせたいと思えてくる。

指導者の視点で

いよいよ第三の読み、「指導者」の立場としての読みだ。

この教材は、「読む」に位置づけられ

た文学的文章。学習指導要領、中学年「読むこと」(1)ウ「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」、オ「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」が主な指導の目標になるだろう。言語活動例ア「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」にも相当する学習だといえる。作者が意図をもって選び抜いた言葉を味わうという意味では、国語科の目標「……思考力や想像力及び言語感覚を養い、……」に深く関わる価値をもつ教材ということもできる。

実際の授業での手立てを考える際には、これらの学習要素を身につけさせることを念頭におけばよいということだ。

いかがでしたか。今回は、「子ども」の視点での読みに重きを置いてみました。他教材と関連させる、子どもたちの実態を踏まえるなど、次回以降も、重点をさまざまに変えた教材研究をご紹介していきます。と思います。

筆圧——力の入れ方を考えよう

新しい指導を考える会

「この子は筆圧が強いね」「この文は、文字が薄くて弱々しいね。書いた子は、優しくておとなしい性格なのかな」などと、筆圧は、硬筆文字を見て話題にされることが多いものです。しかし、毛筆となると、筆圧に注目されることは少なく、半紙に書かれた毛筆文字についても、その評価は字形や組み立て方に集中してきます。筆圧（力の入れ方）を、どこでどのように教え、考えさせたらよいのか考えてみましょう。

1 はじめに

書写では、多くの事柄を理解し、注意しながら文字を書く技能を身につけさせることが求められる。学習指導要領では、中学年に「筆圧などに注意して書く」ということが明記されたが、「筆圧」について、どのように教え、感覚的にどうとらえさせたらよいのか、効果的な指導法

や具体的教材はあるのか、教育現場は困惑しているのが現状のように思われる。指導法や筆圧についてのとらえ方は多種多様にある。現場では、児童の実態に

応じて、創造的な授業を展開するようにしたい。中学年という活動的な発達段階の児童なので、「楽しい書写」を基本として考えてみたい。

教科書での扱いを見ると、三年の単元1「筆となかよしになろう」、P6「筆

ることによる。その意味で、硬筆での筆圧の実態を知っておくことが大切である。

授業のアイデア① 書き取り

下敷きなしで、漢字ノートや国語ノートに一〜二行の書き取りをし、その下のページや裏のページに凸凹がないか調べてみる。

手で触って、紙の裏側がぼこぼこ飛び出している場合には、次のようなことが考えられる。

- ・鉛筆を強く握って書いている。
- ・鉛筆の芯を紙に強く当てている。

そのほか、姿勢・執筆に着目しても、新たな発見が得られるだろう。

授業のアイデア② クイズ

次のようなクイズを提示し、さまざまな紙に力を入れ方を変えて文字を書いてみる。

〈クイズ〉

えんぴつを強く持つ、まぬけなどろぼうの話です。ボスからたから物のありかを聞かされ、わが家からの道じゅんを、しっかり力強くメモをしたどろぼうは、メモどおりの場所からたから物をぬすみ、メモした紙

は用心深くすて、にこにこ顔で家に帰りました。でも、数日後、何も書いていないメモ帳を調べられ、けいさつにつかまってしまうました。

えんぴつを強く持つどろぼうは、どうしてつかまってしまったのでしょうか。

児童は、筆圧によって、道順をメモした下の紙にその跡が残っていたのだということに気づくだろう。その後、次のような学習活動を設定し、どのくらいの力で書くどのような跡が残るのか、実際に試してみさせるとよい。

・いろいろな紙を下敷きにして書く。

・カーボン紙を敷いて書く。

強く書く、普通に書く、弱く書くという三種類の力の入れ方で書くと比較しやすい。その際、筆記具による違いが出ないよう、鉛筆は2B前後で統一しておく。

また、場合によっては、鉛筆を紙に強く押し付け、文字が濃くなるように漢字10文字を書く、鉛筆を軽く握り、紙に対して軽いタッチで漢字10文字を書くなどといったことを試してみてもよい。時間を計るなどし、書く速さとの関係を考えてみるのも興味深い。

こうした学習活動を通し、児童の筆圧

のとくちようを知ろう。」から、力の入れ方、つまり筆圧について意識させている。「ほ」がどのくらい紙と接しているかで線の太さに違いが生じるのだと理解させることが肝要になる。

その後、単元3「力の入れ方を知ろう」での「払い」の筆使いの学習を皮切りに、折れ・はね・そり・点・曲がりなど、送筆や終筆部分の力の入れ方について扱っている。評価にも反映させるようになっていく。書いているときの力の入れ方の感覚は、他人では評価しにくいいため、自己評価が位置づけられている。

これらを踏まえ、授業の形態から、

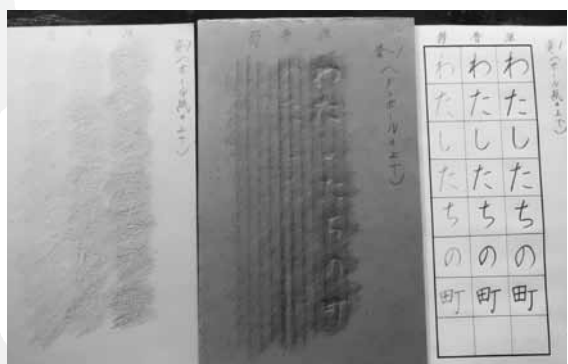
- ①硬筆指導を柱に、筆圧について考える。
- ②毛筆指導を柱に、筆圧について考える。
- ③硬筆と毛筆の両者を関連させて、筆圧について考える。

という三つの観点で、指導法の工夫について考えてみたい。

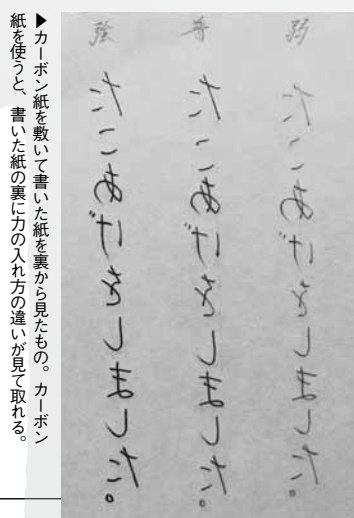
2 硬筆による指導

学習指導要領には「毛筆を使用して筆圧などに注意して書く」とある。これは、そもそも毛筆を、硬筆による書写の能力の基礎を養うためのものと位置づけてい

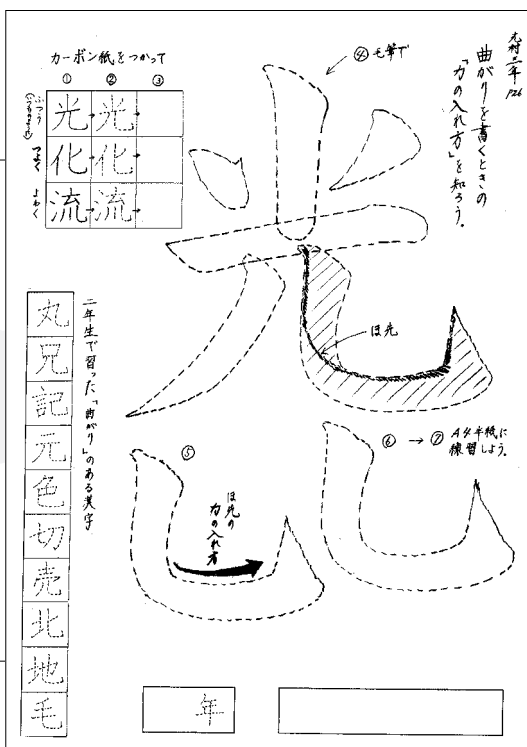
の実態を把握したり、児童の目を筆圧に向ける土台を作ったりしておきたい。



▲右から、3種類の力の入れ方で書いた紙、下敷きにした段ボール、下敷きにしたボール紙。力の入れ方による文字の太さ・濃さの違い、跡の残り方の違いがよく分かる。



▶カーボン紙を敷いて書いた紙を裏から見ると、カーボン紙を使うと、書いた紙の裏に力の入れ方の違いが見て取れる。



▲授業で使った
ワークシート

▶「曲がり」の
部分を全員で
空書きする。



◀カーボン紙を
用いて、力の入
れ方について考
える。普通の力
で→強い力で→
軽いタッチで。



◀教科書は、穂
先の向きの学習
も含んでいる。
しかし、ここ
では、縦から横に
筆が運ばれる際
の、徐々に力が
加わる感覚に焦
点化して指導し
た。

- 4 硬筆と毛筆の両者を
関連させた指導**
- 教科書三年P26・27「曲がり」にお
ける、硬毛関連の事例を紹介したい。
- ①「曲がり」の部分を書き添えて、力の
入れ方を確かめる。
 - ②既習漢字の中から「曲がり」を含むも
のを探し、硬筆で書く。
- 一年生…丸、見、七、先
二年生…丸、記、兄、元、光、色、親、
切、電、読、売、北、毛など

- ③カーボン紙等を用いて、硬筆で「曲が
り」を含む漢字を書くときの、力の入
れ方を検証する。
 - ④「力の入れ方がよく分かるように毛筆
で書いてみよう」と促し、「曲がり」
を含む漢字「光」を毛筆で何度も書い
て、練習する。
- ※六画目の「曲がり」の筆使いに着目
し、力の入れ方を考える。
- ⑤学習を生かして、「曲がり」を含む漢
字を硬筆で複数まとめ書きする。

「毛筆を使用して筆圧などに注意して
書く」学習で、児童の主體的な追究を促
すには、硬筆によって自分の書いている
ときの力の入れ方（筆圧）に関心をもた
せることが不可欠である。

カーボン紙を使用した際、児童からは、
「何、これ？」「これで書くと、おもしろ
い！」という声が上がった。書いた文字
が用紙の裏側に写り、さらに、力の入れ
方によってそこに濃淡が生じる。児童に
とって、それは新しい発見である。クラ
ス中が、書くことを別の角度から楽し
み、関心・意欲を高めた授業となった。

3 毛筆による指導

硬筆に比べ、毛筆は筆圧の変化を視覚
的にとらえやすい。線の太さ等による変
化が分かりやすく表れるからである。し
かし、手の感覚からすると、微妙な筆の
上下運動により、力の入れ方（筆圧）を
感じ取り、身につけることはなかなか
難しい。

教科書三年の単元3「力の入れ方を知
ろう」では、左払いと右払いが示され
力の入れ方を説明している。穂先マー
クで、穂がどのくらい紙と接しているか
始筆・送筆・終筆の部分ごとに示して
いるが、これを書き手の感覚としてどう
伝えるかは難しいところである。

ここでは、書く動作に関心をもたせ、
児童自身が力の入れ方を数字で確かめ
ることができる、実験的な取り組みを紹
介したい。家庭にある体重計や計量器を
使って、筆圧を数値化してみようとい
うものである。

授業のアイデア① 体重計の上で書く

セロハンテープ等で、紙を体重計の上
に固定し、左手の力が加わらないよう
にしてから、毛筆で左払いや右払いを
書く。

0.6 kg



▼右払いのいったん止める、
いちばん力が入る部分。0.6キ
ログラムの力がかかっている。

0.4 kg



▲右払いの書き始めの送筆部分。0.4キ
ログラムの力がかかっている。

授業のアイデア② 計量器の上で書く

体重計と同じようにして、計量器の上
で硬筆で文字を書く。

硬筆での力の入れ方を見るには、10グ
ラム単位で計れる、台所にある計量器を
用いるのがよい。微妙な力の入れ方の
変化をとらえて示してくれる。



▲計量器を用いれば、硬筆の力の入れ方の変化が視覚化できる。

このように数値化することで、児童に
力の入れ方（筆圧）への関心をもたせる
ことができるだろう。ただ、大切なこと
は、この後、何度も何度も繰り返し文
字を書かせることである。数値化により
自覚した力の入れ方についての感覚を、
何度も文字を書くことによって、実際の
手の動きと結び付ける必要がある。



「古典って楽しい!」は、今号が最終回となります。ご愛読ありがとうございました。

※普通、句会では詠んだ人とは別の人が句を清書して提示します。40人学級では時間節約のため、この形をとりました。

教科書にぴったりの漢字教材です。

生活の中で生きる、「漢字力」を伸ばす!

新常用漢字の追加音訓に完全対応しています。

新出漢字を1字ずつ丁寧に学習



別冊テスト
つき

漢字の学習

漢字 かんぺきくん

- 漢字の基礎を固め、テストで習得度を高める。
- 新出漢字の筆順を全分解で表示。

◆1年:年刊 2~6年:上下刊
A4縮小判 56~72ページ 4色刷り
別冊 漢字かんぺきテストつき

学校納入定価 各**380円**

3ステップの反復学習で確実に定着

光村の 漢字ステップドリル



別冊テスト
漢字シール
つき

- 児童が飽きずに何度も練習できる。
- 自学自習にも最適。

◆1年:上下刊 2~6年:各学期刊・上下刊
B5拡大判 32~80ページ 4色刷り
シールつき 別冊たしかめテストつき

学校納入定価 1年(上下刊) 2~6年(学期刊) 各**340円**
2~6年(上下刊) 各**510円**

教科書にぴったりの辞典です。

小学新国語辞典

改訂版



B6判 1,312ページ
別冊付録「国語辞典の使い方」「学年別学習漢字表」
学校納入定価 1,800円

教科書では辞典の学習を
4月に行います。
ご用意はお早めに。

学習時期

3年生4月

(3年上 24ページ
「国語辞典のつかい方」)

学習時期

4年生4月

(4年上 24ページ
「漢字辞典の使い方」)



B6判 1,312ページ
別冊付録「漢字辞典の使い方」
学校納入定価 1,800円

小学新漢字辞典

改訂版

ご採用を希望される場合は、御校ご担当の弊社商品取り扱い店にお問い合わせください。

光村教育図書

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-27-4
TEL 03-3779-0581 FAX 03-3779-0266
<http://www.mitsumura-kyouiku.co.jp/>

研究会のご案内

第57回 全国国語教育研究大会

開催日 平成24年2月3日(金)・2月4日(土)

会場 京都市総合教育センター・京都市立明德小学校

テーマ 言語活動を通して、豊かに学ぶ子(2)

内容 (1日目) 基調提案／オリエンテーション

講話：京都市教育委員会指導主事 橋本真千子氏

提案授業(1~6年)

研究協議会(1~6学年部会)

(2日目) 講演 I：文部科学省教科調査官 水戸部修治氏

講演 II：狂言師 茂山千五郎氏

会費 3,500円

連絡先 京都市立明德小学校内 全国国語教育研究大会本部

〒606-0021 京都市左京区岩倉忠在地町 221

TEL：075-701-0111 FAX：075-701-0112

その他の研究会情報については、光村図書ホームページ内、
「全国研究会情報」のページでご覧いただけます。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/Data/Kenkyu/>

「光村チャンネル」をご存じですか？

「光村チャンネル」という言葉を耳にされたことはありますか？

「光村チャンネル」とは、光村図書のホームページ全体を指したよび名のこと。そこでは、日常の指導や教材研究に役立つ資料や情報をふんだんにご用意しています。多くの方にお役立ていただけるよう、その主なコーナーをご紹介します。

■各教科のページ

教科書・副読本ごとにページを設け、その内容や特色などをご紹介します。年間指導計画資料などの指導用資料についても、こちらでご覧いただいたりダウンロードしていただいたりすることができます。

■シーズン・インタビュー

さまざまな分野で活躍されている方をゲストに迎え、3回にわたってお話をうかがうコーナーです。これまで、松谷みよ子氏(童話作家)、本川達雄氏(生物学者)、石井琢朗氏(プロ野球選手)といった方々にご登場いただいています。ゲストの方のも

のの見方・考え方の一端を知り、子どもたちへの思いに触れることができます。

■光村コミュニティ

こちらは、会員専用のページです。アイデア豊かな指導案・実践事例(「わたしの授業」)や、「国語教育相談室」のバックナンバーなど、より価値ある情報をご用意しています。登録フォームに、ご住所・ご氏名などを入力していただくだけで、簡単に会員登録をすることができます。ぜひ、ご活用いただければと思います。



光村チャンネル

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>